

慈濟

ものがたり

能登半島地震

支援をここで終わらせてはならない





撮影・蔡麗瑜

仏の恩、親の恩、衆生の恩

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運

産んで苦勞して育ててくれた親の恩、

真理を悟るよう教えてくれた仏の恩、

人としての道を歩むよう教え導いてくれた師の恩、

善業を成就させてくれた衆生の恩に、敬虔な気持ちで感謝しましょう。

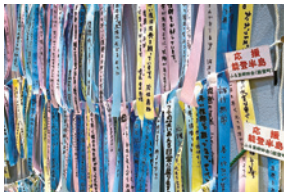
善行と親孝行で親の恩に報い、

仏の心を己の心として清淨を保ち、

努めて衆生を利し、福を造って智慧を修め、

この世を平和で満たすよう、誠意で以て発願しましょう。

表紙



能登町役所の入口には、各地から寄せられたカードや布がいっぱい掲げられ、励ましのメッセージが書かれてあった。(撮影・顔婉婷)
慈済基金会は能登半島地震の被災者ケアを続けている。7日から9日まで石川県鳳珠郡能登町で第二回の見舞金配付活動が行われ、5つの会場で722世帯に手渡された。
(詳細ページ8からページ27)



慈済日本サイト

目次

	【編集者の言葉】	地面が痛まないようにそっと歩こう	慈願／訳	4
	【国際慈善】	能登半島地震		
		自らの手で見舞金をお年寄りに届ける	済運／訳	8
	【今月の特集】	二千五百年前に始まった物語	葉美娥／訳	28
		仏教遺跡を行き来するタイムトラベラー	御山凜／訳	36
		インドの慈済 慈善・教育・医療	葉美娥&施燕芬／訳	47
	【證嚴法師のお諭し】	この瞬間の敬虔さを忘れないように	心嫻／訳	58
	【聞・思・修】	謝罪と許し	江愛寶／訳	64
	【廃棄物の春】	古いジーンズがニューファッションに	何慧純／訳	69
	【特集】	0403台湾花蓮地震	済運／訳	74
		慈済支援24時	慈願／訳	76
		前線部隊を援護し、 後方部隊の先鋒となる	高雄外国語チーム日本語組／訳	79
	【行脚の軌跡】	暗闇で蛍が道案内	済運／訳	100
		六月の出来事	済運／訳	106
		06・07 能登半島穴水町で見舞金配付		

地面が痛まないようにそつと歩こう

四月三日に台湾東部の花蓮県沖で発生した強い地震は、地震に慣れている花蓮の人々を恐怖に陥れ、今も苦しめている。当日、静思精舎に到着したネパールの慈済ボランティア一行は、それでも日程を変えず、直ぐ花蓮ボランティアと一緒に災害支援活動に投入した。ボランティアのユニシュさんは、二〇一五年のネパール地震の後、慈済人が遠くカトマンズまで出向いて支援した諸々のことを思い出した。

「あの地震で、私は家も何もかも無くしました。慈済人が福慧ベッドと毛布を持って来てくれたので、床で寝なくて済みました。被災後四、五年

間、一家皆、福慧ベッドで寝ていました。そして九年が経った今も、そのベッドは家にあります。地域の人にとってそのベッドは記憶として留まっています。それは、私たちの最も困難な時に、慈済の援助を受けた記念の品なのです」。

福慧ベッドは片手で持ち上げることができるが、彼の心の中ではずっとしりとした存在である。人生で最も困難な時に温めてくれたものだからだ。ユニシュさんは目を潤ませた。それは今回花蓮で恩返しできたことをとても幸せだと思ったからだ。

ネパールボランティアに付き添って台湾に来たマレーシアの慈惟（ツウエイ）さんによれば、余震が続く中でも逃げ出そうとは思わなかった。心霊の故郷で一緒に天地が揺れ動く経験をし、大地の響きを聴いたこと

で、「歩く時はそつと、地面が痛まないように」という法師のお言葉を思い出した。一歩一歩傷ついたこの世を労るように慎重に足を運ぶのだ。

この二年間、マレーシアとシンガポールの慈済ボランティアは「仏陀の故郷への恩返し」プロジェクトで先行している。ネパールのルンビニとインドのブツダガヤに交替で長期滞在して、苦難の人々を救済すると同時に、善行して福を作るよう導いている。現地に大乘菩薩法を根付かせ、仏陀の理想を実現するのが目標である。

仏陀は当時の古代インドで衆生に説法をしていた。しかし、「衆生の平等」という生命観を持った仏教思想を説いても、十二、十三世紀にはその土地から消失した。インドのカースト制度は、古代バラモン教のヴェーダ思想に基づくものだが、この制度が早い時期に、インドの憲法の父で

あり、インド佛教復興者でもあるアンベードカル博士によって廃棄が起草されたが、世襲されるカーストの観念は、未だに現地の人々の日常生活に深く根付いている。

「慈済」月刊誌のチームは、取材でインドに滞在していた一カ月間、伝統的な風土と人情を理解すると共に、今まさに起きている変化も目の当たりにした。シンガポールとマレーシアのボランティアは、仏法の理や慈善活動、人文的な情を取り入れ、身分の差によって区別することなく接することで、少しずつ村民に影響を与えている。少なくとも現地ボランティアは、人と人の交流において、カースト制度に左右されないよう取り計っている。衆生への慈悲こそが、今月号で伝えたい二つの重要な報道の主旨である。（慈済月刊六九〇期より）

能登半島地震

自らの手で見舞金をお年寄りに届ける

能登半島地震の被災者は、市役所から慈済が「見舞金」を配付する由の通知を受け取ったが、疑念と期待が入り交じった心境にあった。会場に着いてみると、本当に生活の助けになる現金を受け取ることができた。驚きと嬉しさに感動する以上に、台湾の慈済が花蓮の地震の後も、依然として彼らを忘れずにいてくれたことに感謝した。



(撮影・王孟專)

今年の元日に発生した石川県能登半島地震は、二百六十人が死亡し、一千二百人が負傷、八万棟の住宅が損壊する被害をもたらした。県全体ではすでに水道が復旧しているが、六月上旬の統計によると、依然として二千八百人が避難所で生活をしている。

地震は能登半島を出入りする唯一の道路を寸断したため、救援活動と建物の解体作業を遅延させた。道路が修復されても、

ホテルや旅館が甚大な被害を受けたため、解体業者は泊まる所がない状態にある。また、修復が必要な住宅の数量が膨大なため、解体と再建が遅々として進まないのだ。震源地に最も近い珠洲市を例に挙げると、約四千棟の住宅が全壊し、千人が政府に公費解体を申請しているが、実際に完了したのはわずか数棟である。

今の段階で、住民が最も必要としているのは、現金の補助と再建支援である。県政府と町役場は、「災害義援金」や「生活再建支援金」の支給を公表して、さま

ざまな補助措置を講じているが、住民は高齢者が多く、申請方法がわからないのだ。更に、甚大被災地はどこも交通が不便な田舎であり、市や町の行政人員が不足しているため、大量の申請案件を一度に処理することができない。

慈済が被災地で見舞金を配付するという情報が住民の耳に入った時、多くの人は半信半疑だった。しかし、五月十七日から十九日にかけて穴水町で初めて千九十一世帯が封筒に入った現金の「見舞金」を受け取った時、住民は信じられない気持ちだった。それは正

に恵みの雨だった。

慈済は五月中旬から七月にかけて、穴水、能登、中能登、輪島、志賀、珠洲の六市町で見舞金を順次配付する。対象は地震によって家屋が半壊以上で、且つ六十五歳以上の高齢者がいる世帯である。家族構成の人数に応じて、それぞれ十三万円、十五万円、十七万円が贈られる。

地方政府と慈済が協力

第一回の配付は穴水町で完了した。そ

こは地震発生後、慈済が長期にわたって駐在し、ケアして来た重点地区である。一月十三日から三月三十日まで、二万食余りの温かい食事と飲み物を提供し、延べ七百人以上のボランティアが動員された。

第二回の配付は、六月七日から九日にかけて能登町で行われ、七百二十二世帯が見舞金を受け取った。能登町は北陸でも端の方に位置し、能登半島に囲まれた内海にある。自然との共生を強調した農耕様式が特徴で、世界農業遺産に登録されている。地震の時、震度



六強を記録したため、多くの古民家は強い揺れに耐えられなくなり、倒壊したり、傾いたり、崩落したりした。また、地盤が軟弱な所は住宅全体が傾き、液化現象が起きた地域では地盤沈下が続いた。そして、地震によって火災が発生し、複合災害を起こした所もある。

能登町災害対策本部は運営を続けて、十二の避難所が開設され、百人以上が避難生活を送っている。町全体の高齢者人口はほぼ半数を占め、人口密度も低いいため、集落同士の距離がかなりある。そのため、慈済と町役場は五つの

会場で配付することを決め、高齢者が近くで受け取れるようにした。ボランティアは各会場に早めに行き、配置や整理を行ったが、既に外で待っている住民がいた。

地方政府は、慈済の「重点的、直接的、具体的」という災害支援の原則は理解しているが、日本ではプライバシーを重視するため、被災者名簿を提供することはできないと言った。そこで、役場の人が受付で住民の確認を行い、その後、慈済ボランティアが配付窓口案内して、罹災証明などの資料を確

認することで、見舞金を受け取れるようにした。そして最後に、「住民交流ゾーン」で休憩してもらった。

七十六歳の横地善松さんは、町役場から通知を受け取った時、半信半疑で、先ず会場に行ってみようと思った。彼は会場で、「本当に現金なの

●6月9日、ボランティアは台湾の町役場に似た能登町役場で、被災した住民に見舞金を届けて励ました。(撮影・顔婉婷)



● 6月9日、ボランティアは漁村の鵜川を訪れ、公民館に向かう途中で多くの被害を受けた家の前を通った。あたかも時間が元旦の地震後で止まっているように感じられた。(撮影・顔婉婷)

ですか？振り込みではないのですね？」
と何度も確認した。十五万円を受け取
ることができたことに驚きを隠せな
かった。

待っています。何時の事になるやら」
と友人の家に身を寄せている横地お爺
さんは、「見舞金の出所を聞いて、とて
も感動しました。このお金は大切に使
います。妻や子供たちのために心温ま

る家を建てます。たとえ平屋建てでも十分です」と言った。子供や孫は年に一度か二度しか帰って来ないが、それでも家族のために家を持ちたいと願っている。

横地お爺さんは続けて、「今日受け取った見舞金の由来を皆に伝え、子供たちも感謝の気持ちを持って社会に還元するよと言います。あなたたちから温かさを感じ、自分の新しい家を建てるための力が湧くと同時に、期待が持てるようになりました」と言った。彼は奥さんと共に優しい笑顔を浮かべながら、「あなたたちの訪問を楽しみにしています」とボランティアに言った。

入れた。山林のある小高い丘に位置する日本式建築の家に着くと、ボランティアはお婆さんの家の被災状況がよく分かった。「地震が起きた時、私は台所で調理をしていて、急いで玄関に走ったのですが、揺れが激しくて全く立っていられませんでした。夫は玄関の扉にしっかり掴まってはいましたが、立っていることも外に出ることもできませんでした。私は彼の腰にきつく抱きつき、娘と孫娘はさらに私の腰に抱きつきました。四人が一緒にその場で支え合うのが精一杯で、逃げる事ができなかったのです！」未だ恐怖が残る幸子お婆さんは、当手を振り

重点的に直接配付する 緊急支援の現金

慈済が直接現金を住民に手渡していることについて、多くの人は驚きを隠せず、会場ではしばしば「もったいないことです」という言葉が聞かれた。八十一歳の松田幸子お婆さんは何度も繰り返しした。

お婆さんは、八十四歳の夫である松田外紀男さんと娘、そして二十四歳の孫娘と同居している。見舞金を受け取った時、彼女は涙を拭い続けていたが、家までボランティアが同行することを喜んで受け

返り、天が崩れて地が裂けるように感じ、どこへ逃げればいいのか分からなかったと言った。

家の中の壁は地震で裂けて、一面が崩落し、一家は近くの「小間生公民館」に避難した。被災後、水も電気もなく、女性たちが集まって小さなガスコンロで調理して、何とか十日間を過ごした。一家はとりあえず、金沢市にいる妹の家の近くに借家したが、どうしても自分たちの家に戻りたくて、なんとか整理して住むことにした。

「家が倒れたら、もうだめだ！」と外紀男さんは地震の時、それだけを考えて



●本谷志麻子さんは、6月中旬に能登町公民館の2階にある避難所を離れる予定だ。彼女は、ボランティアが遠方から来て、力を与えてくれたことに感謝した。(撮影・楊景卉)

いた。「だから今生きていて、家族も無事なので、本当に幸運です」と語った。幸子お婆さんは、業者に頼んで寝室と台所を修繕してもらったが、二百八十万円

余り掛った。全部修繕したら、少なくとも一千万円は必要だろう。「修繕業者からまだ請求して来ませんが、慈済が送って来てくれたこのお金で一部を支払えま

す。これで私たちの生活も少しは楽になります。」。

ボランティアの心温まる慰問と傾聴に、多くの住民は深く感動したと言った。「お金の多い少ないではなく、あなたたちが遠くから来てくれたことで、私たちが得たのは、かけがえのない『温もり』と『情』です！」。

住む場所があれば、心が安らぐ

本谷志麻子さんは見舞金を受け取った後、ボランティアを避難所に案内し

さで、風呂場とトイレ、そして小さいキッチンには冷蔵庫や電子レンジなどの家電が備わり、小さい長テーブルもある。奥には小部屋が二つあり、一つはリビングとして使っている。山本さんの奥さんは、「今の生活にとっても満足しています」と言った。

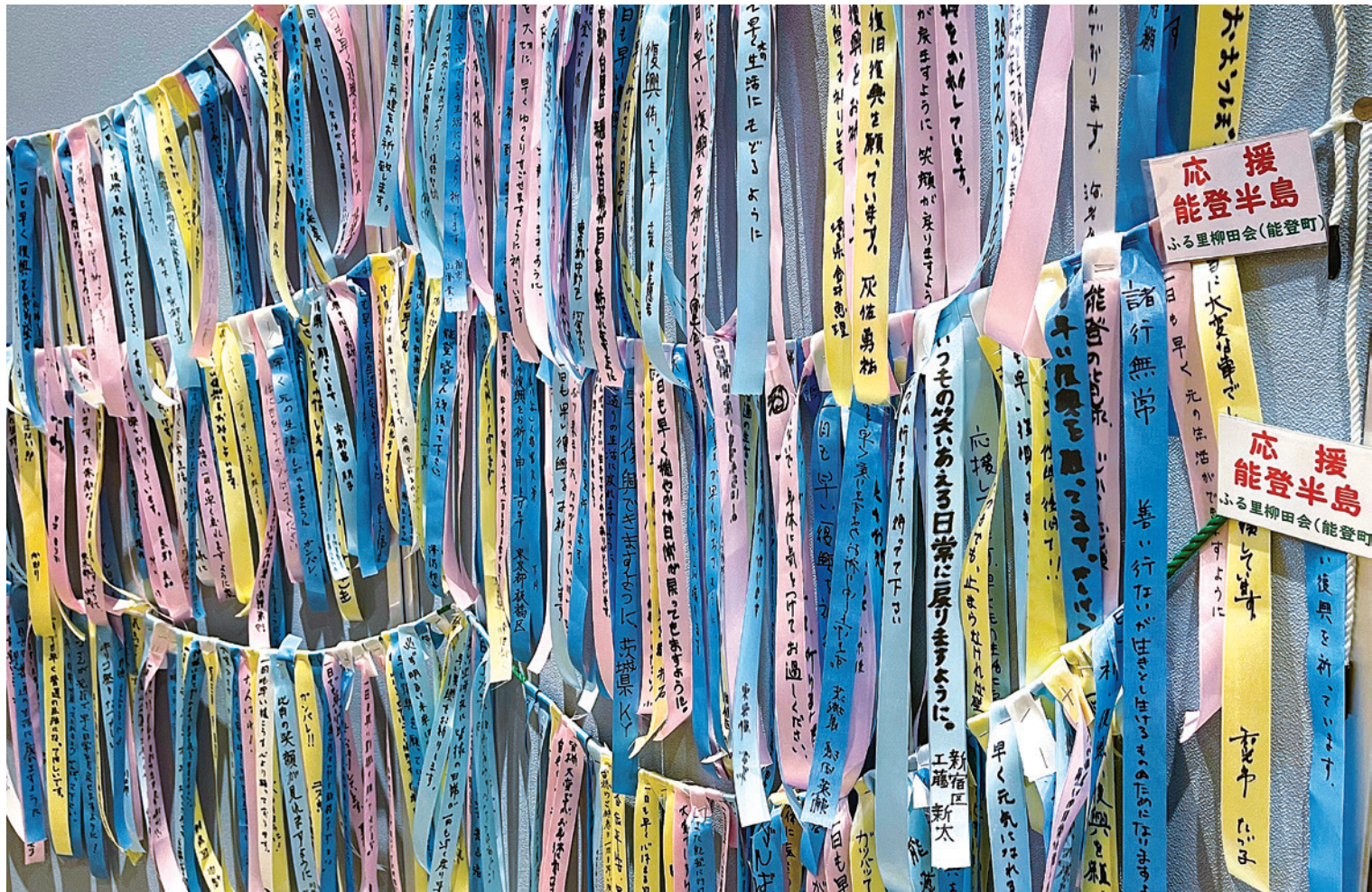
山本さんの自宅前の道路は三・五メートル陥没し、家は表の方に傾いてしまった。被災後、集会所から移って能登中学で避難生活を送っていたが、五月に仮設住宅に移ってから、ようやく生活が安定してきた。「私はこれまで、懸命に

た。それは市役所の隣にある「能登町公民館」の二階にあり、彼女は数枚の段ボールで囲った寝室に五カ月余り住んでいた。六月中旬に友人の家に引っ越す予定で、「見舞金をいただきありがとうございます。日用品を買います。来ていただいたことで力をもらいました」と感謝の意を表した。

六十七歳の漁師、山本政広さんもボランティアが彼の仮住まいを見学することに同意した。藤波運動公園に建てられた仮設住宅で、約百二十世帯が住んでいる。一戸当たり約七から八坪の広

働いて、大勢の子供や孫に囲まれた人生を送って来ましたが、この歳でこんなことに遭うとは思いませんでした。でも仕方ありません……。三十二年間住んでいた家は、見た目には損壊していませんが、間もなく解体されると思うと、言葉に表せない悲しみがこみ上げてきます」。

仮設住宅には二年間しか住むことができないため、山本さんは政府の災害復興住宅に申請することを検討している。毎月費用はかかるが、年金を受給しているため、負担は軽くなる。慈濟

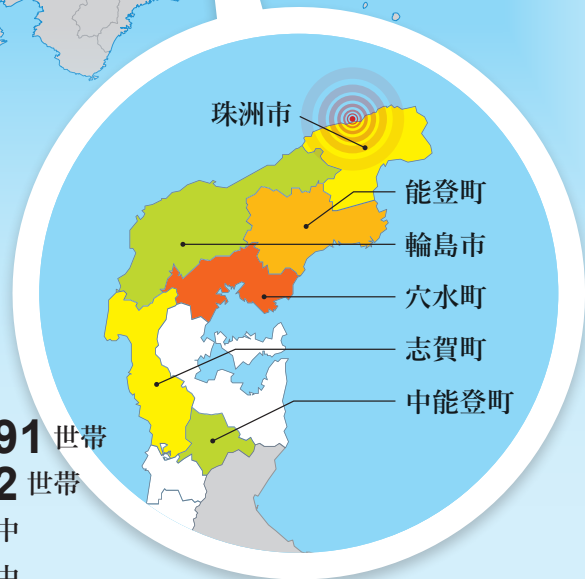


●能登町役場の入口には、各地から寄せられたカードや布がいっぱい掲げられ、励ましのメッセージが書かれてあった。(撮影・顔婉婷)

から見舞金を受け取れたことについて、彼は「日本では非常に珍しいことで、被災地では初めてです。唯一の現金支援なので、とても驚くと共に、嬉しく思っています」と言った。

七十歳の上野実喜雄さんは、金沢市からバスで故郷に戻り、見舞金を受け取った。彼は地震当時のことを振り返り、二度の強い揺れの後、町役場から津波が来るといいうアナウンスを聞いて、

令和6年能登半島地震 慈済の見舞金配付地域



- 第一回：1091 世帯
- 第一回：722 世帯
- 第三回：準備中
- 第四回：準備中

- 見舞は日本で慰めと配慮を意味する。
- 経費は国際災害支援専用口座から提供されている。

急いで避難するよう住民に呼びかけた。しかし、自分の家の変形して傾き、ドアが開かなくなった。細身の上野さんの奥さんは、どこにそんな力があつたのか、素手で強化ガラスの窓を割り、二人は脱出することができた。裸足のまま、近くの寺まで歩いて靴を二足借り、更に高台に避難した。

家主は高齢者への賃貸を渋り、彼らは息子の名義で金沢に家を借りることにした。かつて魚貝類の取引をしていた上野さんは、今は失業中だが、見舞金を使って家電を買うつもりだ。「遠くか

ら来てくれたボランティアに感謝しています。見舞金を配付するだけでなく、熱いお茶やお菓子を出して頂いた上に、平安のお守りまでいただきました。こんなに多くの支援を受けられるとは思っていませんでした……」と言いながら、奥さんは涙を抑えきれなかった。

能登の人々は情に厚く、
誠実で親切

この半年間、ボランティアは被災地を
行き来して、関係者と配付活動の打ち

合わせを行った。證厳法師に災害状況を報告した時、日本の住宅被害の「全壊、半壊、準半壊、一部損壊」などの程度に応じて異なる金額の支援を計画してはどうか、と提案した。法師は「全壊でも半壊でも壊れたことには変わりはありません。区別すべきではありません。また、被災者が六十四歳で、六十五歳に少し足りないからといって助けられないのでしようか？目の前に困っている人がいれば、個別案件にして助けるべきです」と指摘した。

慈濟日本支部の執行長である許麗香

うかは分かりません。このような大金を受け取ることができ、正に恵みの雨です』と言いました。私たちは、能登には美しい山と水があるだけでなく、厚い人情という美德もあることを目にしました。地元の人々は涙を流しながら、『四月三日に花蓮で地震が起き、台湾自身も被災しているにも関わらず、私たちの最も必要な時に自ら支援に来てくれたことに感動せずにはおれません』と話してくれました。

六月中旬、輪島市の公式メディアが、慈濟が月末に見舞金を配付することを伝

師姐によると、東京と大阪からのボランティアが交替で被災地に赴いて炊き出しをすると共に、「仕事を与えて支援に代える」活動に参加した地元の人々を食事に招待した。慈濟カフェは今でも穴水総合病院で運営されており、今回の見舞金配付に繋がっている。東京に戻るたびに、地元の人々の感動の涙が脳裏に焼き付いているそうだ。

「老いた農夫は、『銀行の預金が底をつき、農地の水も尽きてしまいました。数日前に川から二トンの水を運んで来ましたが、これで野菜が芽を出すかど

えると、問い合わせの電話が慈濟日本支部に殺到した。東京や大阪のボランティアが誠意をもって輪島に向かうと聞いた、遠くに避難している住民は、何とんでも戻って受け取りたい、と感動しながら言った。次から次にかかって来る電話に対応しながら、ボランティアたちは、「世界中の愛と祝福を地元の人々に伝えることができて、とても嬉しいです！」と感想を述べた。(資料提供・顔婉婷、呂瑩瑩、黄静蘊、王孟専、呉惠珍、朱秀蓮)

(慈濟月刊六九二期より)

二千五百年前に始まった物語

インドのブッダガヤにある世界遺産のマハーボディ寺院は、仏陀が悟りを開いたことを記念し建てられたものである。

二千五百年余り前、シッダールタ王子は、真理を探究するために出家して修行した。菩提樹の下に静座していた時、夜空に輝く明るい星を見て心が無限に広くなり、悟りを得、衆生に対して説法するようになった。物語は今も続いている……。





靈鷲山で、
我はかくの如く聞いた

三月末のある朝、夜が明ける頃、靈鷲山の祭壇の前で、慈濟ボランティアは《無量義經》を誦するために礼敬した。

靈鷲山は、仏典では「耆闍崛山（ぎじゃくつせん）」と称されることも多く、今のインド・ビハール州ラージギル郊外に位置し、仏陀が生前頻繁に説法した場所である。説法の一つが《妙法蓮華經》であり、《無量義經》はその真髄として、慈濟が五十八年間に亘って精神的拠り所としてきた理念である。



仏の心は師の志 苦難を覆す

マレーシア慈済ボランティアの陳美聰（チェン・メイツォン）さんは、シロンガ村でケア世帯を再調査した時、事故による怪我のために這う動作しかできなくなった高齢の女性を見舞った。

慈済ボランティアが昨年二月にブッダガヤを訪れた後は、シンガポールとマレーシアのボランティアが交代で駐在し、慈善、医療、教育などの志業を着実にやっている。「慈悲喜捨」と「衆生の平等」という仏陀の教えを実践しているだけでなく、「仏陀の故郷への恩返し」という師の志を継承した奉仕である。



仏教八大聖地の一

インドのブッダガヤは、仏陀が成道した場所である。ネパールとの国境に近いビハール州南部に位置し、ヒンドゥー教の巡礼地ガヤにも隣接する。

ブッダガヤの暮らし

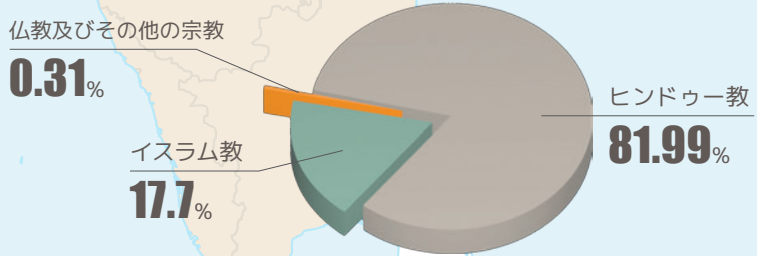
仏陀が悟りを開いた場所であるマハーボディ寺院、市場に漂う独特のマサラミルクティーを煮込む香り、鳴り響くトゥクトゥクのクラクションの音……これらがブッダガヤを訪れた人々の第一印象である。

海外からの巡礼者は年間 50 万人

海外から巡礼や観光で訪れる人の数は年間約 **50 万人** で、ピークシーズンは **11 月** から翌年 **3 月** まで。ビハール州で最も人気のある観光地の一つである。

住民の主な宗教はヒンドゥー教

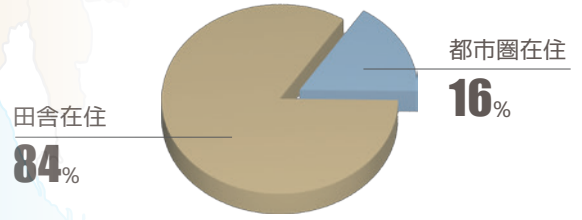
ビハール州の信仰分布：



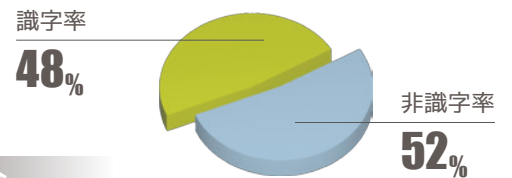
人口の八割以上が郊外に在住

ビハール州の人口は約 **1 億 2 千万** 人だが、その **89%** が郊外に住んでおり、都市化率はインド全土で 2 番目に低い州である。

ブッダガヤの人口 23 万 6 千人



● **34%** が指定カーストに属する ● 中学生の中退率は約 **20.46%**



限られた就職機会

ビハール州はインドでも農業が盛んな州の一つであり、

8 割の人口が農業に従事している。

2021 年一人当たりの所得は **681** 米ドルで、全国平均の **3 分の 1** で、ブッダガヤの住民は農業に従事する他、ホテルやレストラン等のレジャー産業、手工芸品の販売などでも働いている。

勤続半年未満の人が **32%**

昼夜の気温差が大きい

年間でも最も寒い月—— 1 月	年間でも最も暑い月—— 5 月
年平均最低気温 10℃	年平均最高気温 40℃
年平均最高気温 23℃	年平均最低気温 26℃

仏教遺跡を行き来する

タイムトラベラー

慈濟はさまざまな国で貧困救済や災害支援を行っているが、それはそれぞれの縁が結ばれたことに因る。

インドのブッダガヤでは仏陀の「後世に恩恵をもたらす」という教えに対し、恩返しをしようとしている。

シンガポールとマレーシアの慈濟ボランティアが、

豊富な慈善活動の経験とインドを熟知しているという

アドバンテージを活かし、交代で長期滞在しているのは、志を持っているが故の必然的な行動である。

ス

ジャータ村は、インド・ビハール州ブッダガヤに位置する小さな農村だが、そこには、羊飼いのスジャータ

が乳粥をシッダールタ王子に捧げると、六年間の苦行を経た王子は体力を回復したという故事が残っている。その後、王子はついに菩提樹の下で、夜空に宵の明星を仰ぎながら、真理を悟ったのだった。

紀元前二百五十年、アショーカ王はその菩提樹の側にマハーボダイ寺院を建立し、仏陀の成道を記念して聖地とした。スジャータ寺院とスジャータ記念塔が

あるスジャータ村も、聖地巡礼と観光スポットになっている。

マハーボダイ寺院内の金色の大仏像であれ、寺院裏の菩提樹と金剛宝座であれ、二千五百年余り前、シッダールタ王子が宮殿の贅沢極まる生活を捨て、真理を追究するために故郷を離れて流浪したことを想うと、旅人は離れがたい気持ちになる。冬の十一月から三月はピークシーズンにあたり、スジャータ寺院の外では、次から次に観光バスが到着し、旅人が下りて来るが、寺院内外にある路地には多くの指定カーズトに属する人々が物乞い



●長期的に純朴な農村で貧困救済を行い続けてい
る。ボランティアチームは希望の光を見出した。
あるケア世帯はすでに自立できると言って支援の
中止を申し出、慈済が9カ月間支援してきたこと
に感謝した。

彼らは大体朝七時から続々と現れ、夕
方五時頃に離れる。どれほど物乞いがで
きるかは、人それぞれで、運が良い場合
は、一日の収入が約百五十から二百ル
ピーになるが、それは日本円で三百円に
も満たない。

スジャータ村で一人暮らしをしている
高齢のガイナ・マンジさんは、以前一日
中スジャータ寺院のガジュマルの木の下

をして座っている。

そのような状況になるには、それなり
の原因がある。彼らは従事できる職業が
限られており、その上、多くは教育を受
けていないため、生計を立てる能力に乏
しく、「世襲」（カースト）の悪循環に陥
り、物乞いをするのも生計を立てる方法
の一つなのだ。寺院の管理委員会による
と、仏教を信仰する巡礼者は大方慈悲が
あり、群れを成した物乞いの中に高齢者
や子供、障害者がいるのを見ると、憐
れんで施しを与えるため、村人には物乞
いの習慣がついってしまったのだそうだ。



に座って両手のひらを上に向け、観光客から食べ物であれ、金銭であれ、何でも布施してもらっていた。彼は若い頃、仕事があったが、物乞いになった後、路上で人にいじめられ、村人は見るに忍びなく、去年四月慈済に報告したことで、毎月物資が支給されるようになった。

今、スジャータ寺院は依然としてガイナ・マンジさんの「職場」であるが、彼はもう物乞いすることはなく、木彫りの仏像や仏塔、織物などを抱えて、聖地巡礼に来た観光客に販売している。物乞いすれば、比較的容易に収入が入るのだが、たとえ一日に一つも売れなくても、彼は

貧しくなったとは思わない。彼には体力と時間があり、歳は取っているが足取りは軽いので、慈済ボランティアが村に来ると、自発的に道案内をし、代わって村民と交流したり、村の牛の群れが人々に衝突しないよう交通整理をしたりする。慈済は彼に給料を払いたいと申し出たが、彼は「生活は必要な分だけあれば良く、自力更生したいのです」と言った。

ガイナ・マンジさんは、自分は指定カーストに属し、遠くに出かけることはできないが、生活圏内で、慈済の手伝いをして、より多くの隣人をケアしたいと言った。物乞いから善行するまで

になった彼は、「慈済ボランティア」という新たな身分に喜びを覚えている。

誰にも慈悲心がある

三月十七日午前九時、ガイナ・マンジさんは、彼と同じ目的を持つ三十数人と一緒に慈済ブツ

●マレーシアのポランテア、蘇折逢（中央）さんは、仏像彫刻を見つけ、ガイナ・マンジさん（右）がスジャータ寺院の前で販売して生計を立てる手伝いをした。物乞いから手のひらを覆った経緯は、聖地巡礼者からも称賛された。

ダガヤ連絡所に着いた——専業主婦や学校の先生、村長、慈済青年もいる。今日彼らは皆平等な「慈済見習いボランティア」である。台湾の慈済ボランティア見習いと養成制度に則り、この一年間で数回にわたる「精進カリキュラム」を終え、慈善、医療、教育等各項目の活動に参加してきた。

その日の見習い養成講座のテーマは「慈善」で、司会者を務めたシーヤンさんは、正に去年ガイナ・マンジさんを訪ねたメンバーの一人だった。彼はヒンディー語で礼儀作法を紹介した。現地

ボランティアのヴィカシユさんは、スジャータ村に住んでおり、「ガイナ・マンジさんが手のひらを下に向けて人助けする人になったことは、私をとっても励まし、大きく啓発してくれました。私も人助けする人になりたいのです」と言った。

ボランティアたちは一月二十一日、初めて見習い養成講座に参加し、二月二十三日は台湾から訪れた慈済基金会の林静憫（リン・ジンシェン）副執行長が、灰色の慈青と教師懇親会の制服を授けた。しかし三月の講座の時には、ムスリムの人文教師のロージーさんとアリヤ

さんは、いつものようにアバヤやロングスカートを着用し、ヒジャブで髪と頸部を覆って授業に参加した。

ボランティアのスタさんとネーハさんは、長袖、長ズボンとスカーフから成るパンジャービースーツ（インドの女性用民族衣装）を身に着けてやってきた。このような伝統的な服装は、どれもインド女性の主要な衣装である。彼女たちは、ボランティアの制服を持って来て連絡所で着替え、帰宅する前に再び衣装に着替えていた。

専門学校の英語学科を卒業したスタ

さんは、流暢な英語を話すことができるが、自分にあつた仕事を見つけることができないままだった。去年慈済に出会い、「仕事を与えて支援に代える」制度のボランティアとなつて、慈済ボランティアの慈善訪問ケアを補佐し、村民とのコミュニケーションを手伝った。

「私は訪問ケアに参加し、ケア世帯に物資を配付したことで、慈済のことを理解しました」。スタさんは、現地の人としてとても良いアドバイスをマレーシアとシンガポールから来た慈済ボランティアに参考として提供できる上、女性に対



●マハーボディ寺院は、当時仏陀が悟りを開き、仏法を以て衆生を済度した最初の場所である。2500年余り経過した後のある早朝、慈濟ボランティアは一歩一歩歩いて寺院の塔を巡り、心の中で『無量義經』を唱え、仏陀が教えた菩薩法を引き継いで、衆生を利することを誓った。

インドの慈濟

2001年

インド北西部のグジャラート州で**1月26日**、マグニチュード**7.9**の強い地震が発生した。慈濟はアンジャルのコッダ村に**227**戸の恒久住宅を支援建設した。

2020～2021年

コロナ禍期間中、慈濟基金会はインドで**353**の団体と協力して、防疫物資、医療器材及び支援計画を提供した。

2023年

2月13日に慈濟チームはブッダガヤ・シロンガ村を始めとする多くの集落を訪問した。**3月11日**より、マレーシアとシンガポールの慈濟ボランティアが交代で滞在し、長期的にブッダガヤで志業を行っている。

ブッダガヤの一年

- マレーシア、シンガポール、台湾のボランティアが**253**回、延べ**6,924**人が投入した。
- 66**人の現地ボランティアが、ボランティア養成講座、教師懇親会、慈濟青年会に参加した。

する観察も細やかである。
スダさんは、一月に行われた慈濟の歳末祝福会での経蔵劇「千手世界」に参加したが、練習過程で、多くの慈濟手語チームのメンバーが指定カーストの人たちだったことを知って、思いも寄らない問題と苦悩に直面した。「もし、メンバーたちを指定カーストの人たちだと知って交流しなければ、それは慈濟の精神ではありません。なぜなら、慈濟の人文では誰もが平等だからです」。その時、彼女は歌詞の意味をより一層意識した。一人の力に限りはあ

るが、五百人、千人或いはもっと多くの人が喜んで手を差し伸べれば、無数の人を助けるチャンスがあるのだ。
「彼女は慈濟に参加してから、大きく変わりました。穏やかで、善良になり、もう以前のような話し方はしません」。スダさんの夫ヴィシヤルさんは、クリーニング店で働いて一家を養っているが、妻に仕事ができただけで、家庭の経済状況は一層安定し、ヴィシヤルさんはスダさんの変化と慈濟の関係を肯定した。「私は彼女が善行することに大賛成です！」。(慈濟月刊六九〇期より)



慈善

- 長期ケアケース **26** 世帯、緊急ケアケース **16** 世帯
- シロンガ村の火災支援 **5** 世帯
- **36** 戸のシロンガ大愛村が着工
- 職能訓練（裁縫教室、パソコン教室、英語教室）
- 「仕事を与えて支援に代える」活動に参加した人：**12** 人
- 回収した竹筒貯金箱：**283** 本

撮影・蕭耀華 訳・葉美娥

● 村民の雇用の機会を創出するため、ボランティアが村に入って、参加希望者を募った。ガンジス河沿いのビハール村の足に障害がある夫婦は、裁縫のプロなので、3月から福慧袋の縫製を受注した。



慈

済が支援建設する第一期住宅の「シロンガ大愛村」の起工式が、今年二月二十五日、多数の僧侶や来賓及び慈済基金会林静憫（リン・ジンシエン）副執行長、熊士民（シヨン・スーミン）副執行長の立会いの下に行われた。

三十六戸の住宅からなる大愛村は、シロンガ政府学校と道路を隔てた場所にある。古い家屋が取り壊された一部の住民は、近くに仮住まいの家を建て、一部は親戚の家に頼っている。かつてのような土レンガ造りや茅葺き屋根の家は、空き地

さえ見つけられず建てられ、住居番号もなかったが、レンガ造りの恒久的な家を建てるにあたっては、多くの法的手続きと準備作業が必要であることを、村人は知らず、二月に起工式が終わると、直ぐにでも家の建設が始まると思っていた。

今年の三月十日、建築会社がシロンガ大愛村の予定地を訪れ、区画割り、杭立て、レンガの運搬を行った。そして三月

●衛生環境の悪さが農村部における病気の根源になっている。シロンガ村の老若男女がボランティアのリードで環境の清掃を行った。





二十三日、各世帯は家屋に関連する書類に署名した。慈済が委託した地元弁護士のパンカジ・クマール氏は、村民に公文書を読み上げて知らせた。その内容は、各区画の位置、建物の仕様、室内の間取りや設備などである。同意のサインがでない人は、母印を押してもらった。村民のジャヤンティ・クマリさんは、「私たちのために、レンガ造りで二部屋とキッチン、バスルームのほか、電気設備や照明器具などが揃った家を建ててくれることに、感謝の気持ちでいっぱいです」と合掌して言った。

シロンガ村で慈済志業を促進するにあ



●まだ気温の低い早朝に、体を毛布にくるまって暖を取るシロンガ村の人々。屋外の土かまどで牛糞ケーキや木の枝を燃料にしてご飯を炊いていた。村では、農耕と牛乳、そして牛糞ケーキのために牛を飼育しているが、牛肉は食べない。

たつて、シロンガ政府学校で歴史の教師をしているジャヤンティさんは重要な連絡窓口である。昨年の四月、シロンガ村で大火災が発生した時、慈済ボランティアは食糧や物資を持って来た。そして、家々の清掃を行った他、大規模な物資の配付活動、健康診断、ケア世帯への支援などを実施した。ジャヤンティさんは慈済の活動に参加するよう村人に呼びかけた。見知らぬ相手から知り合うようにな

るまで、共に歩んできた様々な心温まる記憶が残っている。

「私の給料では、自分の家を持つなど想像さえできませんでした」。ジャヤンティさん一家十人は、土レンガ作りの家に住んでいて、彼女の教師としての給料二万二千ルピー（約四万一千円）に頼って生活している。シロンガ村の人口は八百人余りだが、大人の半数以上が失業している。慈済は、「仕事を与えて支援に換える」プロジェクトで、村民が住宅建設に従事することで収入が増えることを願っている。

大愛住宅の引き渡し書類にサインしてがって異臭を放っており、野放しにされた牛、羊、豚、犬といった動物たちが餌を漁る場所となっているのだ。つまり、マハーボディ寺院や各国が建立した寺院の清らかさと荘厳さを除けば、周囲は殆ど汚いままである。

三月下旬、慈済ボランティアがシロンガ村で、「證嚴法師が語り継ぐ」という催しを行った時、特別に「床掃除には五つの徳がある」というテーマを選んだ。百人を超える大人と子供が集まり、青いビニールシートいっぱいに座って、カリンの木の下で涼しい風に吹かれながら、真剣に話を聞いていた。お釈迦様の

もらう時、慈済マレーシア・セランゴール支部の副執行長である蘇祈逢（スー・チーフオン）さんは、大愛住宅を清潔に保つために、壁を使って牛糞ケーキを作ってはいけない、と念を押しした。また、これから用を足す場合は室内のトイレを使うこと、至る所勝手にゴミを捨てない、皆で健康的且つ衛生的な生活環境を維持していこうと呼びかけた。

蘇さんの注意の言葉には理由があった。ブツダガヤ市街地と周辺の村落においては、表通りから路地裏、用水路や池から尼連禪河に至るまで、見渡す限りのゴミ山だったため、蚊やブト、ハエが群

教えによれば、清潔な環境で得られる五つの功德とは、自分の心が清らかになり、人々が喜びを覚え、諸仏から称賛され、端正な姿で生まれ変わる善の因に恵まれ、そして往生後は清浄な天界へ行くことができるのだ。熱心に聞き入れた子どもたちは、ボランティアの後について、喜んで一袋、また一袋とゴミを拾い、クナル・クマル君は、「こここのゴミを拾えば、僕たちの村はきれいな状態を維持できて、心もきれいなままでいられるのですね」と言った。清浄の種が村人の心に根付くことを願ってやまない。

（慈済月刊六九〇期より）

医療分野

- 健康診断が行われた場所と参加者：
12寺院、**8**つの学校、**9**つの村。合計**1768**人
- 栄養補給食品の配付：
6つの村で合計**40**人(**90%**の人が体重増加)
- 医療機関の紹介：**127**人
- 長期・短期医療ケアケース：**25**人
- 健康講座：**8**回



●マハカラ山にある留影窟は、仏陀苦行の地と伝えられている。山のふもとには幾つかの村があり、中の1つのラフルナガル村には約300世帯が散在している。健康診断のために村を訪れたボランティアは、血圧や身長、体重を測定し、尿の検査も行った。

教育分野

- 学校で行われた静思語クラス：
457回、延べ**14848**人
- 補習クラス参加者延べ人数：**1915**人
- 学校内人文活動(呈茶、親の足を洗う、親子運動会、慈濟手話)参加者延べ人数：**3205**人
- 教育と医療の融合イベントの回数と参加者延べ人数：
12回**818**人
- **15**校の**4597**人にカバンを配付
- 教員研修参加者延べ人数：**472**人
- 人文補習クラス参加者延べ人数：**2337**人



●教育志業ボランティアチームは、毎週12校の生徒に人文講座を提供し、ボランティアの黄さん(左)が静思語を教えている。生徒たちはヒンディー語と英語、中国語を同時に学んでいる。

この瞬間の敬虔さを忘れないように



手を合わせて
心を一つにし、
心願をかけるのです——
その瞬間の思いと敬虔さを
忘れてはなりません。
日々、
時時刻刻心掛けていれば、
智慧は常に明瞭で
汚れなく
無垢のままに在ります。

一一 千五百年余り前に、仏陀は人間（じんかん）に生まれました。修行し、悟りを開き、世の中の衆生が真理を理解できるようにと説法しました。

それ故に、私たちは仏陀のことを謹んで「大覚者」と呼んでいます。しかし、真理がどれほど良いものであっても、それを弘めなければ、そこに留まったままです。人が道理を弘めるのであり、道理が人を弘めるものではありません。仏法は弘めなければならず、仏陀の願いと智慧を弘めて、人間（じんかん）に善の道を切り開き、誰もが歩めるようにしなければなりません。そして、仏

法を末長く、広く人間（じんかん）に伝承していくのです。

仏誕節と母の日と慈濟デーの三節を合わせた灌仏会は、五月十二日の朝、花蓮の道侶広場を主会場に開催されました。世界十四の国と地域の三十七の地域道場とオンラインで結ばれ、同時参加が叶いました。花蓮静思堂の高い位置から俯瞰すると、チームの団結と整然としたその動きの美しさが分かります。これは誠実な心で行わなければ達成できないものです。同日の夕方、台北中正記念堂のメイン広場に二万人近い人が集まりました。五百二名の各

宗派の法師たちが整然かつ荘重な様子で会場に入場すると、人々の心を動かすと同時に、世界に仏法の真、善、美を示すことができました。仏教を広めるために、灌仏会にご参加くださった大師たちに心から感謝申し上げます。

第一回の式典が終わる頃、雨が降ってきました。司会者が参加者たち事前に用意したレインコートを着るようアナウンスすると、皆は素早く整然と行動しましたが、広場に描き出される図柄もそれに伴って変化しました。この美しい場面を世界中が同時に見ることができたのです。無数の人が敬虔に手を合わせ、同じ思いが諸仏に届くよう祈り

ました。この瞬間の敬虔さを覚えておいてください。日々、时时刻刻心掛けていれば、智慧は常に明瞭であり、清らかな水のように無垢のままに在ります。

一時間の灌仏会は、慈済人が数日間心と労力を費やし、このような荘厳な道場が出現して欲しい一心で、努力して成し遂げたものです。それこそが慈済精神であり、菩薩道から仏心に向かつて歩み、より多くの衆生を済度することを願ったものです。

同じ時間に多くの国や地域で朝山[㊤]と灌仏会が行われました。マレーシアでは、老若男女が長蛇の列を成して支

[㊤]朝山・三步毎に五体投地する礼拝。

部の周囲を巡り、「平穩無事で、世界の平和を願う」と祈る声が聞こえました。私も同じことを毎日祈っています。心から無明が取り除かれ、誰もが発心立願し、愛の心で人々に交じれば、人間（じんかん）は平安になり、世の中に災害は無くなるのです。

仏陀は四十九年間説法をしました。四十二年目から靈鷲山で『法華経』を説き始めました。慈済は、『法華経』と共に歩み、困難も多かったのですが、今は五十九年目に入りました。一つ目の志業は人間（じんかん）に慈善を實踐することであり、貧困のために病気になる、または病が原因で貧しくなる

人々を見て、病院を設立しようと発心しました。そして、医療志業では教育が欠かせないため、看護師や医師を育み始めました。教育志業の次は、人文という清流で世界を包むことを考えました。世界各地の菩薩の皆さんが、心して愛を以て、四大志業をこの世に広く行き渡らせていることに感謝しています。歩んできた道を振り返ってみて、方向が正しく、道に迷ってなければ、今、軽やかな心でいることができ、自分に対して「価値のある人生だ！」と称賛することができます。

仏陀の時代で、靈山法会は永遠に終わることはないと言われたように、今、

菩薩が地中から湧き出るのを目にします。この二年間余り、シンガポールとマレーシアのボランティアが仏陀の故郷に足を踏み入れ、現地で心を込めて多くの縁を結び、善行を行って来ました。五十八周年の慈濟デー当日のボランティア朝会の時、オンラインで繋がりました。一心に精舎と歩調を合わせたいがために、インドの靈鷲山まで光ファイバーを引く作業で忙しかったそうです。花蓮と現地は三千七百公里余り離れていて、時差は二時間半で、時間と空間に距離があっても、心さえあれば、つながることができなのです。

りにいかない、自分が得られない、或いは自分は人よりも多く仕事をしているなど、人と比べるのであれば、それは他人の無明を見ているだけであり、自分がどれだけの時間を無駄にしているか気づかずにいるのです。何事も比較して、計算高くなるのは、実に苦しい人生です。この苦しみの道理を悟らなければ、あなたは迷った凡夫なのです。人は誰でも仏と同等の智慧を持っています。一念の迷いで、幾重もの煩惱を抱えて解くことができないのです。それが人生における最大の障害なのです。仏法は、志の有る人が深く探究する

これが即ち「神通」なのです。精神的なつながりは、「心が虚空を包み込むほど広く、数え切れない世界に達する」が如く、一秒で靈鷲山に到達することができます。

時間とは秒、分、時、日とあって、一分が六十秒、一日が二十四時間となっていて、一日で八万六千四百秒過ぎたと聞くと、とても多いように感じますが、あつという間に気配もなのまま過ぎ去ってしまいます。生活に忙しく、どうしたものかと嘆いても、やはり警戒心を持たなければなりません。もし無意識のうちに関心することだけを考え、思い通

に値します。修行とは心を清めることで、心が明るく澄み切ったものにして、初めて歩むべき道筋が見えるのです。

仏陀がこの世に現れたのは、菩薩を教育し、菩薩法を伝承するためなのです。ですから私たちは、赤子のような清らかな心で学ばなければなりません。もし、中央にこの菩薩道がなければ、永遠に正道が「見」えず、そうならば「悟る」ことはできません。気が付いた時は既に遅いため、心して分秒を善用して、「学」と「覚」の間にあるこの真直ぐな大道を進めば、生生世世行き交う時に迷うことはありません。

(慈濟月刊六九一期より)

謝罪と許し

彼女は、以前もう二度と会いたくない人だと思っていた。五年後、私たちは互いに抱擁し、祝福し合った。

「ごめんなさい。若い頃の私は何も分かっていたなかったので、単純で善良なあなたを傷つけてしまいました！」。

そう言われて、私は涙が止まらなかつた。辛くもあり、感謝も感じた。謝罪し、許しを得るには、大きな勇気が要る。

大 分前のことだが、私は職場でいじめに遭った。当時、「いじめ」という言葉は、社会であまり認識されてなく、私もどのように自分を守れば良いの

か分からなかつた。頭で、自分を慰めたり、前世で「借り」があつたのだから、早く返せば良くなると思ったりしていたが、体は正直にそれに反応し、心の中に

あの事がわだかまりとなつた。

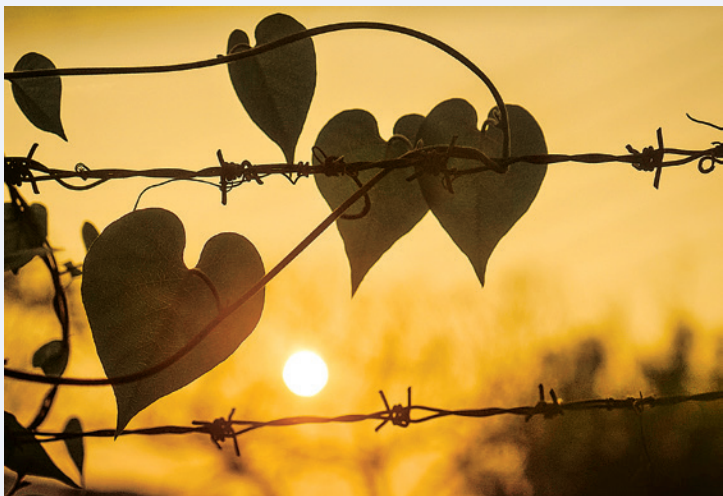
毎朝目を開けて起きた時、出勤するのが辛いと感じた。会社の入り口に来ると、呼吸が苦しくなるくらいの圧迫感があつた。そして、何気なく頭皮に触った時、十元玉くらいの大きさのハゲたところが見つかった。私はびっくりした。その時初めて、円形脱毛という言葉を知つた。主な原因は「ストレス」である。

丁度妊娠したことをきっかけに、辞表を提出した。理由は育児に専念したいからと書いた。私はあの環境を離れば良くなると思っていた。ところが、心の傷は潜在意識に記憶されていた。

退職して五年間、私は何度か、自分が

あの同僚と言い争いをする夢を見た。実生活で抑えていた言葉を夢の中で思う存分吐き出し、涙が枕カバーを濡らして目が覚めた。もう二度と彼女に会いたくない、あの同僚は私の生涯で一番恐ろしい悪夢のような存在だ、と自分に言い聞かせた。

どういうわけか、私が退職した後、相手の態度が大きく方向転換した。毎年誕生日にお祝いのメッセージを送ってくれたり、祝祭日の時に必ず挨拶の言葉を送って来たりした。彼女が私の仕事を引き受けてから、私の苦楽を知り、思いやりが芽生えたのかもしれない。共通の元同僚を通じて、彼女は「心の講座」に参



加してから大きく変わったと聞いた。

しかし、私はまだ彼女に向き合う準備は出来ていなかった。元同僚に集まろうと何度も誘われたが、彼女が来るのなら、私は参加を断った。ある日、同僚は私にこう言った。「みんな、母親になって、態度も柔らかくなつたわ。過去の事は何とかして乗り越えなければならぬのよ」と。私はやっと勇気を出して参加することにした。

五年ぶりに、私は再び自分を傷つけた人に会った。初めはとても緊張して笑顔もぎこちなく、少し震えていた。何時間か経つと、私たちの間のわだかまりは、

皆が楽しそうに子育ての経験を互いに分かち合う中で、少しずつ消えていった。

会の終わりに、彼女は私を抱擁して別れを告げた。その瞬間、電流が私の体を駆け抜けるような感じがした。二度と会いたくないと思っていた人と会っただけでなく、互いに抱擁したのだ。

家に帰って間もなく、彼女からメッセージが届いた。「今日あなたに会えてとても嬉しかった！本当にごめんささい。若い頃の私は何もわかっていなかったので、単純で善良なあなたを傷つけてしまったわ！」。

私は涙がぼろぼろと出て、抑えられな

かった。涙を流したのは、遂につらい思いを分かってくれた、という思いからだ。当時、彼女は私の心に大きな穴を開けたが、彼女は誠意で少しずつ埋めてくれた。あの抱擁とメッセージが穴を埋め、傷を癒してくれた。また涙を流したのは、それ以上に深い感謝の気持ちだった。

人を傷つけても気づいていない人は多く、自分で傷を舐めて暮らしている人も多い。私は幸運だった。私を傷つけた人は自覚し、大きな勇気を持って過去に向き合い、私に誠実に謝ってくれたのだ。

ずっと心の中にあつた腫れ物が瞬時にして消えてしまい、代わりに、リラックス

スした感じと喜びが訪れた。その瞬間、私たちはお互いに悪縁を解消して善縁を結んだのだと知った。

近頃、證嚴法師の海外ボランティアに向けたある開示を聞いた。「過去に人との間に調和が取れないことがあっても、良縁を結ばなければいけません。ですから、帰宅してから気の合わない人に電話を掛けて分かち合うのです。お互いに意見の違いがあったのは、自分が悪かったのかもしれない。あなたに謝ります」と話してみてください。過去の憎しみが解ければ、心も落ち着き、わだかまりは解けるでしょう。返すべきものを返せば、

人と人の間は清らかになるものです」。

人生には、時に人を傷つけたり、人に傷つけられたりすることがあるもの。避けなければならぬのは、人と悪縁を結ぶことである。自分の最期の日を思い浮かべてみよう。後の人が抱くのは私の温かさだろうか、或いは私への恨みだろうか。そうすれば、思わず自分「一仏になる前に、人と良縁を結ぼう」と注意を促すだろう。

謝罪と許しは共に大きな勇気が要る。私たちの心に愛だけが残り、恨みが無いようにしたいものだ。

（慈濟月刊六八八期より）

廃棄物の春

文・顔玉珠（マレーシア・マラッカ支部職員） 訳・何慧純
撮影・顔玉珠、吳玉（マレーシア・マラッカ支部ボランティア）

古いジーンズがニューファッションに

紡績アパレル産業は、石油産業に次いで二番目に環境を汚染する産業である。

ジーンズを一本作るだけで、三千七百万リットルの水が必要とするのだ。

消費パターンを変えたり、古着を購入したり、

古着を仕立て直して新しい服にすべきであり、

「今日のファッション」を簡単に「明日の「ミニ」」にしてはならない。

数

年前、或る友人がジーンズを捨てきれず、吳玉（ウー・ユ）さん

に渡して、自分の考えも話した上で、それを仕立て直してもらった。それは、

吳玉さんのデザインと器用な手を経て、

デニム生地のリユックに変わった。友人はそれを見て、大いに喜んだ。そして、それがきっかけで、吳玉さんは古着を仕

裁断



工夫を凝らすDIY



縫製

立て直してファッションバッグを作り始めた。

七十六歳の呉さんは、普段一輪車を押してコミュニティで資源を回収し、他人のいらぬ物を宝に変えているが、十年前、自宅の前に回収拠点を設けた。回収した古着の中によい品質で、しかもまだ利用できるジーンズや布地、捨てられた様々なバッグなどを見て、異なったサイズと機能のバッグに作り変えている。例えば、リュックや手提げ、小銭入れなどである。そして古着のボタンやフアスナー、肩紐などの部品を取り外して再利用す

る。名実共に中から外まで、エコな再生バッグなのである。

彼女は、製品が出来上がると、とても嬉しくなるが、ただ時間が足りないと言う。古希を迎えた彼女にとって、裁縫は目と集中力をかなり消耗する作業である。それに、デニム生地は厚いので、普通のミシンでは役に立たない。彼女は、自分でデニム生地用の中古ミシンを二台購入して対応した。

縫う前にはジーンズをきれいに洗い、元のデザインに沿った構想で裁断し、それから縫製と装飾に取り掛かる。その工

装飾



程は細かく繁雑だ。だが、デザインが異なるバッグはどれもすぐに売れてしまうので、彼女は嬉しくなり、それが微力ながら続けていく励みになっている。回収した衣類を再利用するだけでなく、環境保護で地球を愛し、更にもその収入を慈済に寄付することで、愛の奉仕をしているのだ。

「私は若い頃に苦労したので、物をとっても大切にできるようになりました。ですから、生地が傷んでなくて、ファスナーが使えれば、全部取り外して、また使います。古着でもとてもエコになり、

とてもおしゃやかなものになります」。呉さんは、好きでやっているから、疲れを感じることはなく、今でも続けているのである。

あらゆる家庭または個人には、着られないものや着古したジーンズがあるだろう。体に合わなかったり、時代遅れになったりしたもので、捨てるのは惜しいが、残しておいても着ることのないジーンズでも、アイディアを発揮して工夫すれば、シンプルな裁断と仕立て直しによって、唯一無二の実用的なファッションバッグになるのだ。（慈済月刊六八七期より）

花蓮地震

【特集】
0403 台湾

花蓮香第一品牌
鳳梨酥
台灣精品伴手禮
花蓮市中興路11號
03-8338899

中山路北濱街交叉路口
(原住民一條街入口)

最好吃的
燒番麥
林記燒番麥

多羅滿 HOTEL
03-831662
花蓮市豐興路123號(新)

花蓮市にある天王星ビルは4月3日の強い地震で傾き、捜索救助隊員が到着した。(撮影・羅明道)

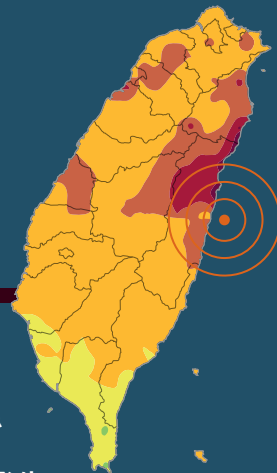
119



慈濟支援

24時

震度 1 2 3 4 5- 5+ 6- 6+ 7



2024年4月3日、
午前7時58分。台湾東部沖で
マグニチュード**7.2**の地震が発生。

災害状況

- 死者 **16** 人、
負傷者 **1155** 人、
行方不明者 **3** 人
- **1999** 年の **921**
震後 **25** 年間で
最大規模の地震
- 気象署が **2020** 年に
地震測定システムを
新しくしてから
最大の記録：震度 **6** 強
- 地表のずれは、
隆起が最大で
45.1センチ、
水平移動が
約 **8.1**センチ
- 余震は、地震発生当夜に
200回以上、そのうち、
M6以上が **2**回。
地震発生後 **20**日間に
1100回以上。
- 台湾全土で
今回の地震で被害を受け
た建物の数は、
花蓮が **468**件で最多。
- タロコ国立公園の
無期限休園が
発表された。

2024年4月23日の統計



8:43 慈濟は県政府より多数カ所で避難所を開設する通知を受け、**11時55分**、静思精舎より温かいお弁当を中華小学校に発送。**12時21分**、福慧ベッドと間仕切りテント、エコモ布が講堂に届き、設置を行う。午後、慈済大学の教師と学生たちが到着して奉仕を開始。夜になると、静思精舎の師父たちが避難民を見舞い、祝福袋を配付。

(写真提供・花蓮慈濟病院
撮影・賴睿伶、陳榮欽、簡因玉、吳垂馨
訳・慈願)



8:20 花蓮本部の職員とボランティアが屋外に出て避難。余震が続いていたため、安全を考慮して、静思精舎大殿右側の芝生にある大樹の下に「本部災害対応センター」を設置し、人力と物資を手配。



同時 花蓮慈濟病院では「中級救急外来レッド九号」を発動し、地震で怪我した **75** 人の手当を行う。当日入院した患者は **10**人で、**200**人余りの医療スタッフを動員。

前線部隊を援護し、 後方部隊の先鋒となる

● 文・葉子豪 訳・高雄外国語チーム日本語組

地震の後、台湾全土で百棟以上の建物に

赤（危険）や黄色（要注意）の紙が貼られた。

甚大被災地の花蓮では、

慈済が公共機関と協力して

第一線の救助人員のニーズに合わせて支援し、

避難所の設置を効率よく行った。

そして、地震発生から二十四時間以内に一回目のお見舞金が届けられ、

四月半ばまでに千四百世帯余りに配付を終えた。

続いて家屋の修繕に着手し、被災者の心身を落ち着かせた。



10:00 北部のボランティアは新店静思堂に災害対応センターを設置し、家屋が損壊した**12**世帯を見舞う。午後、新北市土城区役所より、市民活動センターに避難した被災者のために、福慧ベッドとエコ毛布提供の要請あり。ボランティアは夕方、温かい食事を留守番の人員に提供した。



11:00 国軍花蓮総病院に入院していた負傷者に今回初めての義援金を支給。同日中に天王星ビル**の446**世帯の被災者名簿を受け取り、翌日の午前、一回目の緊急義援金を配付。花蓮のボランティアや志業体職員の家も、それぞれ被害にあったが、皆、制服を身に着けて直ちに被害調査や病院での被災者の見舞い、災害支援等を行う。この日の動員人数は延べ**261**人、配付した祝福袋は**468**個、ケアした家族は**284**世帯。



四

月三日、清明節連休前日の早朝、マグニチュード七・二の強い地震が台湾全土を襲い、震源に近い花蓮県は大きな被害を受けた。県北部の秀林、新城、吉安の三つの町と花蓮市では、多くの家屋が損壊し、タロコ国立公園の遊歩道でがけ崩れや落石が発生した。政府は特捜隊を派遣し、全力で捜索と救助に当たった。

政府が「一級災害対応」を開始すると、慈済基金会は唯一の民間団体として、花蓮県消防局に設置された「花蓮県政府災害対策本部」に駐在した。そして、人的、物的資源を投入し、「前線部隊を援護す

る後方部隊の先鋒」となり、政府や他のNGOと協力して、全力で被災者を支え、最前線の救助活動を支援した。

孤立した山間部に 空から物資を供給

震度六の激しい揺れにより、花蓮北部では、程度の差こそあれ、どの家でも家具が傾いたり倒れたりするなどの被害があった。また、避難中に転倒した人もいて、地震により台湾全土で千百人余りが負傷した。魏嘉彦（ウェイ・ジアイエン）花蓮市長もそのうちの一人だ。

「タンスが足の上に倒れてきたのです。幸い骨折までには至りませんでした」。

左足がタンスの下敷きになって怪我をした魏市長が松葉杖をつきながら避難所で陣頭指揮に当たっていた姿は、凶らずも震災をまざまざと見せつけるものとなった。

花蓮慈済病院のボランティアをしている李思蓓（リー・スーペイ）さんは、二人の娘に、家の中の倒れた物を片付けたら入院している負傷者を見舞うような念を押しした。一回目に病院に運ばれた負傷者は八人だったと彼女は記憶している。そのうちの一人である陳さんという女性

は、地震が起きた時、自分で栽培した野菜を友人に届けるために家を出ようとした矢先だった。ところが玄関で棚が倒れてきて、腰骨を折ってしまった。

「彼女は救急車を待てなかったのですが、タクシーで病院に行きました。立つことさえできなかつたので、救急外来の医師が抱えて降ろしたそうです」と李さんが言った。

タロコ峡谷は、がけ崩れで道路が寸断され、数百人が山間部に取り残された。車両が通行できなかつたため、人員や物資の輸送はヘリコプター頼みとなった。花蓮県警察局は内政部空中勤務総隊に救



援を要請し、慈済にも支援物資の提供を求めた。

「ヘリコプターで支援物資を運んだのは初めてです」。

定年退職した元警察官で、花蓮慈済会の合心チームの幹事を務めるボランティアの許志賢（シユウ・ジーシエン）さんは、日頃から地域の警察や消防と連絡を取り合っており、連絡を受け

●花蓮慈済病院では、多数の負傷者を受け入れる体制を取った。医療スタッフが患者を支えてストレッチャーに乗せていた。（撮影・劉明總）

るとすぐに手配を始めた。四月五日の朝六時には物資の準備が完了し、一行の立ち入りが許可された。警察官と共にバトカー三台とトラック一台に分乗して、立入規制区域のタロコヘリポートに向かい、待機した。

二回目は、ヘリコプターで天祥のホテルに足止めされていたシンガポールや香港からの観光客九人を下山させました。

徳勸（ドーマイ）師父がボランティアたちを伴って現地を訪れ、見舞ったので、彼らは感動のあまり涙を流していました」。

許さんによると、山間部に足止めされていたのは、観光客とホテル従業員、住

民の他、天祥派出所や保安警察など公的機関の職員で、合計六百人余りが食糧と水が必要とされていた。慈済は花蓮県警察、内政部空中勤務総隊と協力して、二回への輸送を行い、道路が通行できるようになるまでの間、足止めされていた人々を支えると共に、世界中の慈済人の思いやりを救援活動の最前線に届けた。

官民が協力し合って 避難住民を支援

花蓮県政府の統計によると、地震により七十七棟の建物が傾くか損壊して危険



な状態になり、千七百戸余りの住宅に影響が出たという。県、市、郷（町）の役所は、県立体育館、徳興野球場、中華小学校、化仁中学校など八カ所に避難所を設け、慈済も支援に加わった。

吉安郷では化仁中学校が主な避難所となり、グラウンドには赤十字社から提供された大きなテントが張られた。七年前に慈済の支援で建設された多機能体育館内には、青や灰色の「ジンスー福慧間仕切りテント」が設置された。中には福慧ベッドとエコ毛布が用意され、被災者のプライバシーを守ると同時に、快適に過

ごせるようになっていた。

避難した人々の様々な不便に対応するため、公的部門や民間団体が避難所に人員を派遣して奉仕した。例えば、中華小学校の避難所では、健康保険署の職員が、着の身着のまま建物飛び出して保険証を持っていない住民のために保険証を再発行し、通信業者は避難者が無料で市内電話をかけられるよう電話機を設置した。また、不動産業者は賃貸物件を仲介し、国軍はグラウンドの一角に野戦シャワーテントを設置した。操作担当の士官は、「一度に十二人がシャワーを使

用することができ、毎日、使用時間帯を二分して、男女を入れ替えています」と言った。

各方面の人々の善意に支えられ、各避難所は物資が十分にあった。しかし、どれだけ完璧な支援も、元来の穏やかな家庭生活に代わるものではない。魏市長は当時の状況を振り返って、『何もかもなくしてしまった……』と気落ちしていた高齢者を、うちの職員とソーシャルワーカーが励まし続けました」と言った。

●4月3日午後、證嚴法師が花蓮市街地の傾斜したビル現場で、ボランティアと救助人員を見舞った。（写真提供・花蓮本部）



● 4月5日午前7時半、1機目のヘリコプターが着陸し、慈済が支援した物資を受け取った（上）。天祥地区に留まっていた外国人観光客たちは機内から降りても動悸が止まらず、ボランティアが関心を寄せた（左）。
（撮影・陳光華）



市長は、東華大学の顧（グー）教授に心から感謝した。教授は、このような被災者の気が晴れるようにと、車で景色の美しいキャンパスに連れて行き、精神的な傷を癒そうとしたそうだ。

また、数多くの震災支援の経験から、慈済は被災者の苦しみや心の痛みをよく理解しているため、経験豊富なボランティアを避難所に派遣し、専門のソーシャルワーカーや衛生機関の特別カウンセラーと共に、被災者のケアに当たってもらった。

慈済基金会慈善志業発展処総

に働く専門のカウンセラーも喜んで協力しているという。

被災者に寄り添い、
宗教の力で心のケア

台湾全土で倒壊する危険性のある建物は四十カ所余りあり、主要構造上の損壊ではない建物は七十カ所以上ある。慈済は家が損壊した避難世帯を見舞い、

●地震翌日の午前、ボランティアは天王星ビル近くの東浄寺で最初の災害見舞金配付を実施した。（撮影・劉秋伶）

合企画室防災チームの専属スタッフ、黄玉琪（フワオン・ユーチー）さんの話によると、避難所で心のケアに当たっているボランティアは、被災者が二次被害を受けないよう訓練を受けているため、一緒



一日でも早く安心した生活ができるよう、北部と花蓮の千四百世帯余りを対象に、世帯人数と被災の程度に応じて、二万元から五万元の災害見舞金を手渡した。

花蓮慈濟ボランティアは、災害見舞金と慰問品を手渡す時の会場の移動経路にも気を配った。台北から来たボランティアの王宣方（ワン・イーフォン）さんによると、住民は先ず一つ目の丸テーブルでボランティアやソーシャルワーカーの協力の下に、書類に記入してから、災害見舞金や結縁品（縁結びの品）を受け取る。それから、二つ目の丸テーブルで休

憩してもらうが、この時はボランティアと精舎の師父が付き添う。「師父と話をすれば、心が落ち着くのです」と王さんが補足した。

小さい丸テーブルでは、ボランティアと精舎の師父が住民の話に耳を傾けていた。

「私は一人だから、せいぜい何日か友人の家をはしごすればいいのですが、お年寄りがいたり、子どもがいて学校に通っていたり、特殊な事情のある家庭はどうしたらいいのでしょうか」。頼さんは住居が地震で損壊した上、働いていた店も仕事がほとんどないため、休業に追

込まれた。一時的に収入がなくなっても、家のローンは待ってくれない。それに、被災者が多いため、適当なアパートを借りられるかどうかも心配だという。配付を受け取った後で、彼女はそのような問題と不安を語った。

校舎の支援建設で 減災防災と災害支援

慈済大学と慈済科技大学の教師と学生、東部の慈済青年懇親会の若者たちも、地震の後、積極的にボランティアに応募した。慈済の支援計画に従い、慈済大学

の学生三十人余りと引率の教師たちは、まず中華小学校、化仁中学校、徳興野球場へ支援に向かった。

「テントや福慧ベッドの設置、被災者に配付する物資の袋詰めなど、ボランティアとしてできることはたくさんありました。僕たちは力を合わせて無事に仕事をやり遂げました」。

こう話す慈済大学理学療法学科修士課程の楊景湧（ヤン・ジンヨン）さんは、インドネシア出身の留学生だ。故郷ではほとんど地震がないため、当初は激しい揺れにかなりショックを受けたが、その後、勇気を奮ってボランティアに参



●大規模な配付が5回行われ、精舎の師父やボランティアが被災者の声に耳を傾けた（撮影・邱俊誠）

加した。それで清明節の連休は忙しく過ぎた。

楊さんはある時、雨が降っていたため、駐車場に行く住民のために傘を差して付き添った。

「苦労して手に入れたマイホームが一

瞬にして無くなってしまつてね……」

被災者のため息交じりに言ったが、彼

は心が痛んでならなかった。

「ありがとう。あなたたちがいなくなつたら、この先どうやって暮らして行けばいいかわかりませんでした」。被災者の

言葉に、彼は強く胸を打たれた。

「あの時、一人の人間として、人の役に立っている実感しました」と、彼はしみじみと語った。

慈済大学学士再入学中医学科の林世峰（リン・スーフオン）さんは、簡単な英語を使って、震災当日の心の変化を見事に表現して見せた。

「Taker（もつかる人）からGiver（与える人）に、Victim（被災者）からVolunteer（ボランティア）になったのです。午前中は動揺していましたが、午後はボランティアになって人々が安心できると、自分も落ち着き

取り戻しました」。

被害を最小限に抑えるには、日頃から訓練を繰り返して災害に備えることが必要だ。「災害を最小限に止めるには、源からリスクを最低限まで抑えることです。備えるということは、自然に逆らうのではなく、災害は必ずやってくる予想して、災害状況に合わせて訓練することで準備ができるのです」。呂学正（リュ・シュエジン）さんは、防災マネジメントの四つの段階におけるサイクルについて大まかに説明した。「三番目は臨機応変な対応によって、実際に災害が発生した時、様々な支援活動をすることです。復

興と再建は最後の段階です」。

二〇一八年の〇二〇六花蓮地震の後、防災支援の能力を強化するため、慈済基金会は、花蓮県政府と「共善協力覚書」を交わすと同時に、新城、秀林、吉安の三つの町及び花蓮市との間に「防災・災害支援協力協定」を結んだ。関連業務に携わる多くの公務員は、慈済の避難所運営研修に参加したことがある。また、県消防局と慈済が共催した防災士養成研修にも参加し、内政部認定防災士の資格を取得した人もいる。

花蓮市社会・労働課の蕭子蔚（シャオ・ツーウェイ）課長はこう話す。

「私たちは地域発展協会の会員研修も実施しました。昨年の中政府の災害対策訓練で、全員、実際に操作して練習したので、今回は皆落ち着いて対応できました」。

花蓮北部の慈済減災希望プロジェクトで建設された六つの校舎は、今回の地震を想定通りに耐え、プロジェクトの狙いを見事に体現した。即ち、老朽化した校舎を建て替えたことが、防災、減災を図るだけでなく、災害時の避難所確保になったのである。これは防災マネジメントの四段階のうちの「減災」と「臨機応変な対応」の良いモデルともなった。

真剣に対応し、災害を防ぐ

「一般に学校の体育館は、安全係数を校舎の一・二倍にしていますが、私たちはそれよりも高い一・七倍に設計しています」。慈済基金会営建処顧問の林敏朝（リン・ミンツアオ）さんは、かつて被災希望プロジェクトの責任者を務めてい

た。化仁中学校の多機能体育館を建設した時、採光をよくするためにガラス窓の面積を広くとる一方で、SRC構造にすることで、軽量の屋根と壁を採用することができ、高い耐震性を確保したという。「学校の建築物に関しては、地震が来ても倒壊しないのが前提ですが、そればかりでなく、住民の避難所としての役割



●地震が発生した当日の昼、慈済は政府が立ち上げた避難所を支援した。その晩、精舎の師父が訪れて被災者を見舞った。（撮影・陳榮欽）

も果たせるよう設計しています」と林さんが補足した。

同じく減災希望プロジェクトで建設された国風中学校は、防災と臨機応変な対応を具体的な行動で示した。四月八日午前九時三十一分、花蓮県秀林郷でマグニチュード三・三の地震が発生したが、震源の深さは僅か六・二キロメートルで、学校との距離も近かったため、校内では激しい揺れを感じた。

地震警報が鳴るや否や、全校生徒千九百人余りは直ちにその場で身をかがめ、その後、速やかに校舎を離れてグラ

ウンドに集合した。車椅子の身障者生徒も教師やクラスメートの手を借りてグラウンド脇に避難した。クラスごとに人数を数え、教師も生徒も全員無事だと確認した後、劉文彦（リュウ・ウエンイェン）校長が朝礼台に上がって再度、注意を促した。

「地震が起きる度に、初めてまたは新たな地震だと思ってしまうようにしてください。『狼が来た』という物語のように、どうせ何も起きないだろうと、高を括ってはいけません。地震が起きた時はいつも落ち着いて、冷静に行動してください」。

小さな地震だからと軽視したり、建物が丈夫だからと安心してたりしてはいけない。老朽化した国風中学校の校舎は、慈済によって耐震性の高い新校舎に建て替えられ、倒壊の心配はなくなったが、学校では今でも、いつ何時襲ってくるかわからない地震に対応する準備をしている。起こり得る災害に備えて真剣に考え、万全を期しておくことが、被災の唯一の方法なのである。慈済は、被災世帯への災害見舞金の配付、入院している負傷者への慰問、葬儀場での「助念」、支援物資の準備といった第一段階の緊急

援助が終わると、第二段階の生活再建支援を始める。慈済は、四月中旬に花蓮州政府、T S M C 慈善基金会と役割分担を話し合った結果、主に新城、秀林、吉安の三つの町で住居の修繕を受け持つことになり、低所得者、病人、身寄りのないお年寄り、幼い子どもなど、弱者世帯を優先した。台湾全土から参加した専門ボランティアは、四月十八日から被災状況の調査と施工を始めた。そして、世界中の慈済人は、被災者の生活再建を支援するために、愛を募る募金活動に取り組んでいる。（慈済月刊六九〇期より）



暗闇で虫が道案内

◎文・釋徳侃／訳・済運

災害に見舞われて生活が困難に陥った人は、助けを必要としています。

彼らの一時的な困難を解決するうちに、長期的に支援を必要としている人に出会うことができます。

今

年の元日、能登半島で強い地震が発生しました。日本の慈濟人は一月半ばから現地で炊き出しを行い、最初の緊急援助は一月末で一段落しました。旧暦の正月（二月上旬）の後、二月中下旬からは、第二段階の炊き出しを始めました。そして、「仕事を与えて救済に代える」方式に取り組み、加えてカフェを立ち上げました。すると、被災者と医療スタッフの不安定な心も、落ち着きを取り戻していきました。

台湾チームも二月二十七日から三月十四日まで、日本の慈濟人と共

に奉仕と取材をし、三月二十二日に精舎に戻って報告しました。その後、日本の慈濟人は、東京と大阪と、能登半島で拠点にしていた古民家をオンラインで結び、今回の活動に関して上人に報告すると共に、今後の支援について指示を仰ぎました。

上人はこう指示しました。「生計に困っている家庭や、病気の人で子供を学校に通わせる負担が重くなった家庭は、全て慈済の長期ケア対象にすべきです。日本の社会福祉は健全で、大衆の生活は一般的に裕福ですが、やはり貧しい人はいるのですから、今回の地震で、慈濟人は支援を必要としている人たちを見つけたら、縁を逃さず奉仕してください」。

「私たちは慈善団体として、支援が必要な人に奉仕するのが使命であり、責任だと考えています。日本の慈済会員の数に従って、その分だけ奉仕するではありません。慈済は国際的な人道組織ですから、被災して困難があつて、助けを必要としていれば、駆けつけます。緊



急援助を行ってこそ、長期的支援が必要な人に出会えるのです」。

「私たちは行動で以って奉仕し、人々にこのような団体があることを知ってもらおうのです。何事も『蛍が道案内する』ように、蛍の光がどんなに弱くても、暗闇では人の目で見ることができ、誘導することで徐々に結集して力は大きくなり、元々は狭かった道が大道に切り開かれるというものです。慈済が世の中を照らす光を明るくし、人間（じんかん）菩薩を導くために行っていることは、募金集めだけではありません。

謝景貴師兄は能登半島地震の被災地から台湾に戻り、現地の伝統工芸である「輪島塗」の漆器を紹介した。（3月22日）

その主旨は心を募ることです。暗闇の中で蛍の光が見えるようにするには、蛍の群れが必要であり、あらゆる蛍が元気を出せば、光が強くなり、道案内ができるのです」。

「私たちは先ず現地を見て、よく考えてから支援を行動に移しています。台湾であれ日本であれ、皆が一致協力して、生活に困難をきたしている人や高齢者、行動が不便な人に生活上の支援を提供するのです」。

許麗香（シュー・リーシアン）師姐は慈済日本支部を代表して、上人が日本の弱者を思いやり、現地の志業に大きく力添えしてくれたことに感謝しました。「私は遍く世の衆生を大切にします。もつとボランティアを募らなければなりません。日本の慈済人は、後続の支援を準備する一方で、自分たちの肉親や友人たちに慈済が支援活動に乗り出していることを話し、皆で善行するよう呼びかけるのです。そして、慈済がこの六十年近くの間をやってきたことを話し、人々に慈済の会員になるよう励ますのです。要は、人心を浄化して、正しい方向に菩薩道を歩んでくれるように願っているのです」。

「仏陀の故郷に恩返し」プロジェクトの価値

三月五日、「仏陀の故郷に恩返し」プロジェクトに投入しているマレーシアとシンガポールの慈済人たちが精舎に帰り、上人に報告しました。上人は、それに応えて言いました。

「皆、師父の心願を聞き入れ、私の心の声と共鳴して、積極的にネパールのルンビニとインドのブツダガヤで奉仕してくれています。以前から貧しい生活をしてきた住民を助け、仏教の正法を仏陀の故郷に回帰させていることに感謝します」。

「私たちが今世で願力を發揮して成し遂げれば、未来へと続き、未来の人が今の歴史を目にすることが出来ます。彼らもその方向に則って更に引き継いでいくでしょう。仏陀の故郷の人々が心身ともに安住し、安定した良い生活ができるようになれば、仏陀の正法が世に根付いたと言えます。これこそ私たちが今このプロジェクトを始めた価値なのです」。

インド・ブツダガヤに建てられるシロンガ大愛村は、二月二十五日に起工式が行われ、六カ月後に完成する予定です。「これが起点となり、慈済の決意を現すことになるでしょう。先ず現地の最も貧しい人たちの身と心を落ち着かせ、生活を安定させなければなりません。彼らが安心して生活ができるようになった姿を目にすれば、他の人たちにも期待が高まります。彼らがニーズを示せば、慈済はそれに応えることができます、村全体を完璧なものに建て替えることができます」。

「現地の人々が、慈済は心から貧しい人が安住できるように、安定した生活ができるようにと願って助けているのだと分かれば、自信が湧き、皆が結集してより大きな力となるのです。そして、彼らの一人ひとりが慈済の会員になることを期待しています。募金は目的ではなく、彼らが慈済と自分との繋がりを見つけるための方法です。そこから慈済を自分の人生の方向として受け入れ、仏法が正しい道であると確信すれば、菩薩行を現地に根付かせることができます」。

六月の出来事



訳・済運

06・02	<p>◎慈済インドネシア支部は2003年、北スマトラ州メダンの低海拔地域に位置し、洪水被害に遭った、国立六十六、六十七、六十八ペラワン小学校の支援建設を進め、2004年に竣工した。本日、学校の20周年記念として、インドネシア慈済人医会メンバーとボランティアから成るチームが、学校で施設を行った。歯科、耳鼻咽喉科、皮膚科、一般内科の診療に加えて、行動が不便な人の家に往診した。543人の保護者や教師、生徒及び住民に祝福を届けた。</p> <p>◎慈済基金会は、0403花蓮地震被災者ケアプロジェクトにおける「安住計画」を本日、県庁舎において花蓮県政府と協力する由の契約を</p>
-------	--

06・07	06・05	<p>交わした。広東街と信義街の交差点付近に被災者が一時的に入居可能な集合住宅を再建する案で、低層の集合住宅様式が採用された。初歩段階では122戸の1LDK、32戸の2LDKの建設が計画されており、双方が手を携えて被災地の復旧と再建に尽す。</p> <p>慈済基金会と台湾モバイルは、「企業共善」における協力覚書を交わした。「活動ごとに企業が支援する」共善プロジェクトで、台湾モバイルの「OP店の立ち上げパッケージ」という新規出店サポートの推進、そして同社の5180にダイヤルすると簡単に寄付と通話料と一緒に支払いができる「5180即寄付」という支援と合わせ、3つの行動を通してデジタルエンパワーメント、高齢者介護、地方の創生という慈善における三大領域に力を入れている。</p> <p>慈済基金会は能登半島地震の被災者ケアを続けている。7日から9日</p>
-------	-------	--

06・14	06・09
<p>慈済基金会は長期的にモザンビークのサイクロン・イダイ被害における支援建設プロジェクトを展開しているが、本日、EPCエストウー</p>	<p>◎慈済アルゼンチン連絡所は、市民社会団体「国境なき太陽と緑の会」(Asociacion Sol Y Verde Sin Frontera)と本年度第一回冬季配付活動を催し、現地の32の貧困世帯に米と食糧セットを配付し、171人に祝福を届けた。</p> <p>◎インドネシア・アチエ州の慈済ボランティアは、メラボー大愛村で1100袋(1袋5キロ)の米を配付して、住民が安心して祝日をごせるようにした。当大愛村は2004年のスマトラ島沖大地震の後に建てられたもので、近年はコロナ禍の後、通貨の下落とインフレに見舞われ、慈済ボランティアが途切れることなく、村民のケアを続けて来た。</p>

06・08	
	<p>まで石川県鳳珠郡能登町で第二回の見舞金配付活動が行われ、5つの会場で722世帯に祝福を届けた。(詳細ページ8から27ページ)</p> <p>◎ドミニカの慈済ボランティアは、アンカー財団の要請に応じて、UFHEC大学歯学部と共同でサントドミンゴ市オリンピックパークにおいて、無料の歯科検査サービスを50人のアスリートに提供すると共に、歯学部 of 教師や学生に慈済と竹筒歳月の精神を紹介した。</p> <p>◎慈済インドネシア支部は、ノースジャカルタ・ペンジャリガン町のカマルムアラ村で、「貧困支援建設プロジェクト」を実施しているが、これまでステップ4が完成し、30世帯の住民が新居に移った。ステップ5は2024年3月16日に始動し、ボランティアが村で視察し、8世帯に対する支援建設を行う。本日、支援を受ける村民が同意書に署名した。</p>

	06・22
<p>◎慈済ネパール初めてのコミュニティセンターがルンビニ文化都市第11里にあるマハーデーヴァで運用を開始した。現地ボランティアのサントシュさんが自主的に住居の一階を提供し、慈済のコミュニティセンターとした。中には仏堂、多用途室、職能養成・裁縫クラスがあり、村の女性が自宅の近くで手に職を付けるスキルを学ぶことができるようになった。</p> <p>スリランカは南西の季節風の影響による豪雨と強風で被害が出た。12日まで既に37人が死亡し、23万人が影響を受け、1万6千棟余りの家屋が損壊した。慈済スリランカ連絡所のボランティア6人が7日、政府の許可を得て、被災地のカルタラを視察し、一軒一軒訪ね、政府から受け取った被災者名簿と照らし合わせた。本日、572の被災世帯に米、ヒラ豆、麺、粥、茶葉、食用油、ミネラルウォーター、石鹼、毛布などの物資が入った生活パックを配付した。</p>	

	06・17	06・18
<p>ロ小学校で、再建される13校の合同起工式が行われた。243の教室が建設される予定である。</p>	<p>本日、慈済基金会モザンビーク、サイクロン・イダイ被害長期支援建設プロジェクトの1つである、メトウシラ大愛村の移管式典が催され、フィリップ・ニユシ大統領の主催で記念碑の除幕とテープカットが行われた。当大愛村はファソラ州ニヤマタンダ郡メトウシラにあり、2022年4月12日に工事が始まり、今411戸の恒久住宅が完成した。</p>	<p>◎慈済基金会は政府の農業部食糧署に「食糧の人道支援」を申請し、本年度分として1200トンの米をハイチへの支援に充てる。一回目の300トンは本日、現地の通関手続きが終わり、順次学校、病院、孤児院及びコミュニティに届けられ、貧しい高齢者や病人、子供など社会的弱者を支援する。</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494

マレーシア
セラランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2024年7月19日発行・331号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



仏陀悟りの地で弘法利生を誓う

マレーシアとシンガポールのボランティアから成るチームは、證嚴法師の願いである「仏陀の故郷への恩返し」を銘記し、昨年3月ブッダガヤに着いた。その後、交代しながら長期駐在し、この一年の間にスジャータ村、シロンガ村などで慈善、医療、教育、人文方面で貧しい住民を支援してきた。また、シロンガ村で36戸の大愛住宅を建てることを計画し、台湾のボランティアも記録チームを支援するために現地へ向かった。一周年の前日、ボランティアチームは、仏陀が悟りを開いた場所であるマハーボディ寺院を訪れ、「弘法して衆生を利し、広く仏陀の故郷を浄化します。上人、誓います！」と発願した。（文・朱秀蓮 撮影・蕭耀華 インド・ブッダガヤにて 2024年3月7日）



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり